

オレンジ色の震撼

私の中の「中越大震災」

経済学部経済学科1年 竹下奈穂



本震の揺れの中で、停電して暗闇だったはずのあのときの居間の情景を思い浮かべようとするといつも、なぜかオレンジ色の濃淡で頭に浮かんでくる。1年たったいまも――。

その日は久しぶりに肌寒さを感じる日だったので、弟と私は母に靴下を履いておくよう言われていた。本震のあった2004年10月23日午後5時56分、長岡市のわが家では、東京で仕事をする父と姉を除いた母・弟・祖母・私の4人全員で、早めの夕食を終えるところだった。

突然大きな手で家をわしづかみにされてゆさゆさと揺すぶられたかの

2004年10・23
—— 5・56 pm

ような揺れを感じ、辺りが停電した。驚いた祖母が懐中電灯を探そうと必死に立ち上がるのを、全身の力を込めて押さえて座らせ私が代わりに探したものの、いつもの場所にはなかった。電気はすぐに戻り、私は足もとに揺れで柵の下に落ちてしまっていた電灯を見つけた。

断続的に揺れが続く中、母は弟と祖母を連れ外へ出た。私は2階にいる犬も、と階段を駆け上った。壁が落ち、階段は細かい砂状の膜で覆われていた。犬の小屋にはガラス戸のついた柵が倒れかかり、その割れたガラスはその檻のような形状の小屋を貫いていた。一瞬「刺さったかな」などという尋常ではない考えにとらわれたが、大丈夫だった。犬は小屋の外へ出て、尻尾を下げて震えていた。抱きかかえて逃げようとしたところ

で急に携帯電話の充電器を持っていかなければという考えが閃き、階段脇の自分の部屋に入って割れた人形ケースを踏みつけながら、それだけを探して外で待つ皆のもとへ向かった。

弟と見た流れ星

外へ出ると気温が一層低くなったように感じた。しかし、靴下を履いていたのでそれでもいくらか和らいだのではないだろうか。大きな余震が続いていた。いつ崩れるか分からないような木造の家の中へやつの思いで入っていき、安全のためにブレーカーを落したり、寒さを凌ぐために冬用のコートを出してきたりする母の姿を見ていて、ふとこれらどうなるのだろうかという念で一杯になった。涙が出てきそうになった

が、小学4年生ながら隣に住む1歳年下の少年を怖がらせまいとする弟を見て、しつかりしなくてはこの思いが溢れた。弟と見つけた不思議な形の流れ星は、ただ気味が悪く感じただけだった。

小さな橋を渡れば目の前に小学校があるが、橋も危ない。危険を承知で渡るか、少し離れたところにある高校のほうへ行こうか。2つの選択肢をめぐって思案の末、目の前の小学校へ町内でまとまって避難できたのは午後9時過ぎだったと思う。なんとか場所を見つけて落ち着いた頃には既にその小さな体育館に約800人が避難してきていた。床にもらったダンボールとビニールシートを重ねると、底冷えは少し良くなった。けれども、地震が起こる直前に低い地鳴りが聞こえることに気づいた私は、余震の度に心臓がキューと縮むように痛かった。

夜中の2時頃になって、地震直後に親類や友人から送られていたはずのメールがたて続けに届いた。外に逃げ出さず、父や姉とは直接電話で話せたからよかったものの、どんな通信手段も災害時には弱いのだ

と心細くなった。現地にいるのにも
かかわらず情報が入ってこないとい
うことに、違和感を覚えた。「きよ
うの模試の続き、明日もやるかな
あ」という友人からの受験生らしい
メールを見て、自分たちの身に起き
ていることの実感が湧かない気持ち
がよく分かった。「たぶん学校休み
じゃないかな。けっこう大きい地震
だったみたいだし。いま近くの小学
校の体育館に避難してるよ」と返信
を送った私もまたそのような気持ち
であったから。

翌日、惨たんたるわが家へ

次の日から、地震など夢であつた
かと思わせるような青空が広がった。



石灯籠も倒壊、四方に吹き飛んだ

ほとんど床が埋
まっていた。寒
さを防ぐ最小限
の衣服と貴重品
だけ持って、そ
の日は避難所へ
帰ることにした。
戻る途中震度5
強ほどの余震が
起こり、心臓が
止まりそうにな

母と一緒に一度家の様子を見に行こ
うと家に向かった。私の目から見
ると、家はひどい状態だった。車庫脇
の柱は根元からひび割れ、内玄関の
壁は至るところが落ちていた。ガラ
スが散らばっているのが家の中には
土足で入らねばならなかった。母は
危ないから来なくていいと言ったけ
れども、そんな家の中に母を一人で、
というのがなんだか嫌な気分だっ
たので、私も入る、とだけ言ってい
ていった。窓はことごとく鍵が開
き、両側とも三分の一くらい開け放
たれた状態になっていた。地震の振
動によるものだと気づくまではあま
りに規則的で気持ち悪く思った。台
所は、食器棚から落ちたお皿や器で

るほど驚いた。急ぎ足で待たせてい
る家族の元へ戻った。

避難所では、地元ラジオ局FM
なおかのチャンネルで地震の情報
が常に流されるようになり、菓子パ
ンや手作りのおにぎりが配給される
ようになった。近くにあるスーパー
マーケットにも立ち寄ってはみたが、
道路にヒビが入ったりマンホールが
地面からとびだしたりしているせい
か商品の入荷もない様子で、棚はが
らんどろであつた。そんな中での配
給は私たちの肉体的な疲労を回復さ
せただけでなく、外とのつながりを
感じさせ、精神的な逼迫の状態も軽
減させたように感じる。本当にあり
がたいことだった。

実を言うとそのときは私も必死で
あつたので、これがこれがあつたのは
何日目で……、という詳細なことは
はっきりとは覚えていない。ただ、
普段の生活とは驚くほどかけ離れて
いて怖かった。

東京の父に「いまは来ないで」

この頃にはもう、みんなのストレ
スは膨大なものになっていたと思う。
配給のときに、わがままをつぶやい

たり、走ってもらいに行ったり、イ
ライラしたりする人が現れてきた。
私の場合、受験勉強など捗るどころ
か進められなかった。じつさい避難
所は、被災者のプライバシーが侵害
される場所でもあつたのだ。壁もなく
四六時中他人に生活を見られてい
ると感じながら限られた空間に留ま
たままでもいたら、その精神的な圧迫
から体調を崩すのも当然だ。臨時の
診察室に行く人が多くなった。お年
寄りもなさらである。私も本震の
あつた翌日から体調を崩し、何度か
薬をもらいに行った。ストレスのた
めか飲んでもほとんどよくはならな
かったが、診療室があるだけでもい
いことだと感じた。

父は「とにかくそちらに行く」と
言い張ったが、狭くてそれ以上の受
け入れを制限しているような避難所
に被災してない人が加わり配給を
受けるのはなんとも心苦しいので、
「私ができる限り母の助けになるよ
う努めるから、いまは待っていて」
と無理を言つて頼んだ。

空を覆う救援へり

空にはものすごい数のヘリコプ

ターが轟音をたてて飛び交っていた。一生分のヘリコプターを見た気がする。それに、頭上に鳥を見た記憶がない。中にはメディアのものもあったが、大部分は救援作業をしてくれている自衛隊のものであった。私の通っていた長岡高校までは家から十分ほどで行くことができたが、犬の散歩と兼ねて避難中は毎日のように様子を见に行っていた。

徐々に片づけも進めていくことにした。しかし余震はものすごい頻度で発生していたので、玄関の扉はがらりと開けたまま。片づけをしている途中に外に逃げ出すこともしげしばあった。恐ろしいことに、膝から下は常に地面が揺れているように感じるようになっていた。

そうやって日中を過ごしていると、家の電話がたびたび鳴った。多くは親戚や、知人からの見舞いの電話であった。しかし同じ長岡の中でも地盤によるものであろうか、揺れがだいぶ違ったようで、被害の小さかったところに住む人の何気ない一言に、母も私も随分と気が滅入ってしまった。相手が悪いというわけではないが、そう思わざるを得ないような状況に、もううんざりだった。

況に、もううんざりだった。建築士さんが家の被害の状況を見に来てくれ、いまのところは家が崩れる心配はないという旨を伝えてくれた。怖ろしい思いをしていたので、専門家の一言だけで、余震に気を配りながらも、随分と安心して作業ができるようになった。

それまでは休校の情報はラジオを通じて得ていたのだが、携帯電話のWEB機能を使って高校の連絡用ホームページを開いてみると、生徒の安否確認を行っていた。あわてて家のそばの小学校に避難している旨をメールで学校宛に送信した。また、その時点で地震から9日後の11月1日に学校が再開される予定であることも知ることができた。でも、実際にはどうしても先のことなど考えられなかった。クラスのみんなはどうしているだろう、ケガをした人はいないだろうかとあれこれ思い巡らしつつも、時が過ぎるのは遅かった。

「自分を守る」といつ価値観

そんな中、弟の担任の先生が生徒の状況確認で訪ねてきてくれた。学校の様子やこれからの大まかな予定

を伝えてくれたようだった。弟は学校や友だちのことを聞けて落ち着いたのか、母の手伝いをきちんとこなしてくれるようになり、とても頼りになった。

弟を見ていてふと悟ったのは、災害時には自分の身は自分で守らねばならないということ。ありきたりに思われるかもしれないが、これは中越大地震が発生したことにより私の中に確立した価値観の、重要な考え方の一つなのだ。

災害時、人々は普段の生活では感じ得ないような計り知れないストレスを体の中に蓄えることとなる。そのような状況の中でもし、家族の一人だけが全ての責任を一身に背負い、自分の体のことなど顧みずに奔走したらどうなるか。頼られた者が精神的にあるいはそれがもとで肉体的に参ってしまうのは必至だ。私の周りでは母がほぼそうなってしまうていた。辛そうにしているのを見るのもまた辛い。だから自分でできることは自分でする。単純なことだがイザというときにできるかどうかで、負担はずいぶんと変わってくるのではないかと考えるようになったのだ

た。

地震時刻で止まった時計

10月28日にはガスが漸く復旧することになったので、家に戻ることにした。6日間の避難生活は終わった。帰るとすぐに母がお風呂の用意をしてくれ、体を流すことができた。それもいつ地震が起きるか分からないので短時間ではあったのだが、とにかく家にいるということではびんびんに張り詰めていた気持ちも和らぎ、やっとため息がつけるようになった。といった状態だった。

ふと掛け時計を見て驚いた——針は地震のあったその時刻を指したまま止まっていた。突然の揺れで電池が外れたのだろうが、あの時計を見たときの衝撃は忘れられない。庭にはばらばらになった石灯籠や、それが衝突したせいで壊れた塀が1メートルほど通路にはみ出たいへん危険な状態になっていた。地震で壊れたモノの全てが元通りになるのには長い時間がかかるということも、それらが直るうが直るまいが「風景の欠落感」を拭いきれないだろうことも一日瞭然だった。地震で壊れたコ



地震直後の様子をケータイで何枚も撮った。
これは押しつぶされそうな犬小屋のまわり。

11月10日、確か昼前
だったと思う。震度5強
の揺れが起きた。怖い思
いをしながらも教室に留

まっていたら、と考えるとぞつとする。
地震を通して見えてきたものは、
人間の作るものの脆さ。地震でいうと、
いや、私には地震でしか言えないが、
確かに私たちは地面から離れて生活
することができないし、防ぐ手立
てはない。自然の中で生きている以上
その気紛れに左右されうるのは仕方
がないことではないだろうか。抽象
的な言い回しになってしまうが、私
は「自然にストレスを与えないよう
な暮らし方」で、かつ、いままでの
経験から考慮したとき想
定されうる範囲の災害に
は確実に対応できる「目
に見える」対策を突き進
めていかなければならな
いのだと思う。時間がか
かるのは分かっている。
それでもいまから始めな
ければ、さらに遠い未来
の出来事となってしまう。
二の舞は何度も踏むもの
ではない。

まっついていると、校内放送で流れグラ
ウンドに逃げるよう指示が出た。晴
れの日でよかった、と心から思った。
私はたまたま、避難した後ひそ
かに携帯電話で家に連絡をとってし
まった。学校が始まってから家族は
日中離れているのが当然なのに、気
持ちはとても焦っていた。高校はそ
の後放課になったのでよかったが、
弟の通う小学校は通常通りだったよ
うで、母も信じられないという様子
だった。

災害は、心の余裕を奪うものであ
ることが改めて感じられた。
さまざまながあつたけれども、
大学生になつたいま、たくさんの人
と知り合う機会を持つようになった。
出身地を聞かれると、新潟県です、
と答えることになるのだが、ほとん
どの人に地震に関して尋ねられる。
そこで感じたのは、限られた人し
か語ることのできない体験を、私に
も伝えていくことができるのではな
いかということだ。たびたび口にす
るのでは、経験していない人にとつ
ては尋ねるときと同じようにただの
軽い話として聞こえてしまうだろう。
それは仕方のないことだ。ただ、私は、

家族や自分が本当に苦勞した日々を
無意味にしたくない。
最近では新潟もようやく地震が少
なくなつたのだが、大学生になつて
今度は東京でまた地震の心配をして
いる。おかしな話だ。本当にこの1
年は矢の如く過ぎてしまった。

メディアとの落差——心のケアを
メディアでは、人的被害や建造物
被害の面から、中越大震災は規模で
は阪神大震災とは比べものにならな
いというように報道されていると見
受けられる部分が多々ある。
今回の新潟県中越地方で発生した
地震において、注目すべきは被災者
の精神的な部分である。新潟の人々
は何があつても前向きに考えようと
する県民性であるように私も感じる。
しかし、厳しい環境であつたことは、
エコノミー症候群の発症人数や、阪
神大震災の教訓から学び対策を講じ
ていた中で孤独死の発生からだけ
でも十分に感じ取れる。
これから先、重要な対策の一つ
として、被災者の心の傷のケアを進
めていってほしい。そのことを、私
は強く願っている。